様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１９３

研究課題名（和文）カトリック改革における幻視表現の成立と展開に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Formation and Development of Visionary Representations in the Catholic Reformation

研究代表者
宮下　規久朗（Miyashita, Kikuro）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：３０２８３８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀に始まるカトリック改革によって幻視（ヴィジョン）という主題はきわめて重要な主題となった。幻視と鏡合わせとなるのが顕現であり、聖なる存在の顕現と、それを見る幻視者との組み合わせで構成された幻視絵画は、イタリアに始まり、スペインで全盛を見てフランドルで版画家されて世界中に伝播した。また、民衆が教会に奉納するエクス・ヴォートは、基本的に幻視絵画のスタイルをとっていた。本研究において、幻視と顕現の中心であった聖母の様々な図像や美術史的な意味を考えた『聖母の美術全史』（筑摩書房）、さらに植民地にまで広がった幻視絵画の展開や意味を追った『バロック美術』（中央公論新社）やいくつかの論文を上梓した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2021年6月に上梓した『聖母の美術全史―信仰を育んだイメージ』（筑摩書房）は、従来宗教学や美術史の各時代ごとに論じられていた聖母マリアについて、カトリック改革期を中心に現代にまで及ぶその意義や機能を総合的に考えた初の書物であり、2023年10月に上梓した『バロック美術―西洋文化の爛熟』（中央公論新社）は、カトリック改革によってローマで始まった幻視などの主題が西洋中に広がり、中南米などの植民地や東欧・ロシアに伝播した様態を追ったもので、総合的な視点によってバロック美術の全貌を概観した。いずれの本も広く読まれ、日本ではきちんと知られていない聖母やバロックの美術について啓蒙普及することができた。

研究成果の概要（英文）：With the Catholic Reformation that began in the 16th century, the subject of visions became an extremely important subject. The combination of visions and manifestations, which is composed of a manifestation of a holy being and a visionary who sees the manifestation, began in Italy, reached its peak in Spain, was printed in Flanders, and spread to the rest of the world. In addition, ex-voto votive offerings made by the people to churches were basically in the style of visionary paintings. In this study, I published "The Complete History of the Virgin's Art" (Chikuma Shobo), in which I considered various iconographies and art historical meanings of the Virgin, who was the center of vision and manifestation, and "Baroque Art" (Chuokoron Shinsha), which traced the development and meaning of visionary paintings that spread to the colonies and published several articles.

研究分野：美術史学

キーワード：幻視　顕現　カトリック改革　聖母　バロック　エクス・ヴォート

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

16 世紀に始まるカトリック改革は、その後のキリスト教美術に大きな影響を与え、バロック美術の興隆をもたらした。そこでは、プロテスタントの否定した教義を再確認し、強化すべく、聖母・聖人の崇敬、法悦、殉教、慈善といった主題が流行したが、中でも幻視（ヴィジョン）という主題は、17 世紀のヨーロッパ各地できわめて重要な主題となった。幻視と鏡合わせとなるのが顕現であり、聖なる存在の顕現と、それを見る幻視者との組み合わせで構成されたものを「幻視画」とよぶ。イタリアに始まり、スペインで全盛を見てフランドルで版画家されて世界中に伝播したが、その過程については研究されてこなかった。また、民衆が神に感謝を捧げるために教会に奉納するエクス・ヴォートは、基本的に幻視画のスタイルをとっている。本研究では、カトリック改革によっていかにして幻視表現が生み出され、それが普及して非西洋や民衆的な画像に及んだかについて調査し、研究する

２．研究の目的

幻視画がいつどのように生まれ、いかにして西洋中に伝播したのか、それはカラヴァッジョ以降の写実主義とどのような関係にあったのか、またそれが祭壇画や個人注文の宗教画だけでなく、いかに民衆的なエクス・ヴォートに適用されて流行するにいたったのか、そして日本のような非キリスト教圏においても幻視表現がいかにして要請され、流行したのかを解明する。

３．研究の方法

①聖人や俗人が聖なる存在を見る幻視と顕現という主題が、いつ、いかなる状況で生まれ、どのように伝播したかということを調査する。そのために、この主題の関係資料を調査し、西洋の各地に所蔵される版画資料を渉猟して、図像の発生や影響関係を探求する。また、イエズス会らの宣教師や神学者の言説や議論から、幻視に関する言説を洗い出し、美術表現との関係を探る。これらの調査によって、聖人や俗人が超越的な存在を見る幻視表現や幻視画がいつごろからどこで始まり、どのように電波したのかがある程度辿れると予想できる。
②幻視画を基本とするエクス・ヴォートは、カトリック改革の影響を受けてどのように成立し、流行して定着したのかを調査する。そのために、教会や美術や宣教師のもたらす版画と庶民的な画像との相関関係を考えて調査する。また、エクス・ヴォートが集中した代表的な聖地や教会の図像を調査し、奉納時期によって分類する。そして、そこにいかなる機能や伝承があったのか、それについてどのように語られたかについて資料を渉猟して調査する。幻視と顕現を伴うエクス・ヴォートが、どこで発生したのかを特定することはおそらく不可能だが、特定の地域のエクス・ヴォートを精査することによって、その成立と変容過程をある程度あきらかにすることができると考えている。こうした調査によって、カトリック改革が庶民の信仰や想像世界にいかなる作用を果たしたのかがあきらかになるだろう。
③日本やマカオにおけるキリスト教美術における幻視表現の流行について調査し、考察する。

【1　研究目的、研究方法など（つづき）】

日本におけるキリシタン美術は研究が進展してきたが、基礎的な調査の段階にとどまっており、主題や図像からの考察は少ない。そこで、長崎、神戸、大阪、京都、東京にあるキリシタン美術の遺品のうち、油彩画、版画、お掛け絵、メダイなどに見られる幻視に関わる図像と表現について調査し、西洋の先行図像と比較してその特質をあきらかにする。またマカオや中国に残る数少ないキリシタン美術についても調査し、同様の観点から幻視表現の伝播について考察する。西洋の版画や日本のキリシタン美術と比較することによって、その成立過程や影響関係、意味について考察する。

４．研究成果

2019 年度は、幻視表現に関連する資料を収集し、とくに聖母の図像と祭壇画の機能について調査した。 2020 年３月初旬にはベルギーとドイツに赴き、多くの美術館と教会、図書館を訪れ、初期ネーデルラント絵画から 17 世紀バロック絵画までの作品と関連資料を 調査した。祭壇画と空間、作品と観者との関係について、ヘントのシント・バーフ聖堂にあるファン・エイクの「ヘント祭壇画」、ルーヴェンのシント・ペトル ス聖堂にあるディルク・バウツの「聖餐祭壇画」、ケルン大聖堂のシュテファン・ロッホナーの「大聖堂祭壇画」について詳細に調査し、ヘントでは大規模な「ファン・エイク展」も見て、初期ネーデルラント絵画の写実性と聖性について考えることができ、得るものが大きかった。そのほかこの出張では、ケルンの聖母被 昇天聖堂で、ゴシック建築とバロック様式の接続の様態を調査し、同地の聖ウルスラ聖堂では膨大な聖遺物と展示空間について、またブリュッセルの聖カタリナ聖堂では黒い聖母の展示と民間信仰について考えることができた。いずれも、像のある空間が信者にいかにして聖なる存在を近くさせうるかという問題にとって示唆的であった。

また、幻視とも関係する「召命」の表現と意味について考察した。とくにカラヴァッジョの《聖マタイの召命》についての諸問題（マタイ問題）をめぐって、宗教改革の争点となった予定説と自由意志との関係から新たな解釈を試み、さらに召命と回心や殉教との関係などについて考えたことを、著書『カラヴァッジョ《聖マタイの召命》』（筑摩書房、2020 年２月）にまとめて出版することができた。

2020 年度は聖母の顕現図像について調査し、図像と文献を渉猟した。聖母図像の始まりとイコンの発展、ナラティヴ表現の展開と「嘆きの聖母」などのアンダハツビルト（祈念像）との関係など、幅広く調査した。聖母の神学的意味や図像については、ドイツで刊行されて聖母研究において定評のある『マリエンレキシコン』全６巻を入手し、その内容について学ぶところが多かった。カトリック改革期の聖母図像を中心に、グンテンベルクの『アトラス・マリアヌム』（1672 年）の諸版を検討し、記された顕現の場所と図像について検討した。それらが、中世の民間信仰と 19 世紀以降に喧伝されるようになる聖母の顕現とを架橋する役割を果たし、バロックの幻視画および聖母の顕現図像と大きく関わるものであることがわかった。

また、疫病の流行と聖母図像との関係について考察し、17 世紀の事象について論考を発表した。とくにヴェネツィア、ボローニャ、モデナ、ローマ、ナポリで のペスト流行と美術の果たした役割について文献資料を集めて調査した。そして、14 世紀のペスト流行時に成立した「慈悲の聖母」図像は見られず、奉納画や幟旗においてペストの惨状の上空で神に

【1　研究目的、研究方法など（つづき）】

とりなして祈る聖母の図像が流行したことがあきらかになった。奉納画（エクス・ヴォート）においてはペスト終息感謝の ために、大天使ミカエルや土地の聖人とともにほとんどの場合に聖母が描かれ、聖人や奉納者に顕現している。惨状の表現には、いくつかのトポス（定型表現） が成立しており、次代に継承されたこともわかった。

2021 年度は、昨年度に引き続き、聖母の主題について研究した。聖母像の起源から現代にいたる表現の歴史を概観し、中でもカトリック改革による聖母イメー ジの強調と称揚、イコンの再評価、バロック美術における幻視表現の流行、中南米、中国、日本といった非西洋圏への聖母図像の伝播と変容などについて考察し た。 聖母の登場する幻視画やエクス・ヴォートを広く収集して分類した。また、ドイツのイエズス会士ヴィルヘルム・グンペンベルクの『アトラス・マリアヌス （マリア地図）』（ミュンヘン、1657 年、改訂版 1672 年）は世界各地のイエズス会士と連絡して調査を協力し、奇蹟的な力をもたらす聖母像が 1200 例も集められ、その場所や祝日などによって分類された詳細な索引が付されている書物で、これを詳細に検討し、そこからあきらかになる聖母信仰の広がりや聖母イメージ の庶民への浸透について考察した。

コロナ禍に関連して 14 世紀と 17 世紀にヨーロッパを襲ったペストと美術におけるその影響について、とくにカトリック改革期のヴェネツィア、ボローニャ、 ローマ、ナポリなどイタリアの動向について考察し、『学術の動向』などいくつかの媒体に論考を執筆した。以上の研究の成果は、2021 年６月に上梓した単著『聖母の美術全史―信仰を育んだイメージ』（筑摩書房）にまとめることができた。

2022 今年度は、あいかわらずのコロナ禍によって海外調査に行けなかったため、あまり研究が進展しなかったが、主に文献資料によって研究した。具体的には、幻 視と顕現に関する資料と版画を渉猟し、わずかながらもいくつかの知見を得た。今後、論文にまとめるつもりである。バロック美術に関する原稿もまとめて執筆した。

公刊されたものとしては、以下のものがある。「バロック ローマと各地の動向」「カトリック改革と美術」キリスト教文化事典編集委員会編『キリスト教文 化事典』丸善出版、2022 年８月、308-311、386-387 頁。 また、共同監修者および翻訳者として長く従事していた『ヴァザーリ 美術家列伝』（中央公論美術出版）の全６巻が完結したが、この仕事を通して広くイタ リア・ルネサンス美術における私のテーマを考察することができた。

2023 今年度は本研究の総まとめの意味で、『バロック美術―西洋文化の爛熟』（中央公論新社）を 2023 年 10 月に上梓した。その中で、本研究のテーマである幻視表現については、第４章「幻視と法悦―幻視絵画から総合芸術へ」で詳しく論じ、本研究の内容を、広く k17・18 世紀の西洋美術の動向の中に位置づけようとした。

また、小田部胤久東大教授との共著『西洋の美学・美術史』（放送大学教育振 興会、2024 年３月）において、第 11 章「幻視と召命―キリスト教美術の本質」でこのテーマについて論じた。

また年度末には、フィリピン、マニラに調査に行き、カトリック改革期から 18 世紀までに建てられた諸教会をめぐり、とくにサン・アウグスティン聖堂とフィリピン国立美術館では、スペイン植民地時代に作られた絵画・彫刻・多翼祭壇・工芸などのキリスト教美術を多数見ることができ、イタリアやスペインのキリスト教図像の植民地への伝播と変容、受容と土着化の興味深い様態を理解することができた。

そのほか、関連する研究として、「歴史画と集合的記憶」（中村高朗・虎岩直子編『芸術と

【1　研究目的、研究方法など（つづき）】

記憶—ラビリントスの谺』法政大学出版局、2024 年３月所収）、 “The Virgin in Modern Japanese Art”, Chiara Franceschiniand Yoshie Kojima eds, The Other Side of the World: Sacred Images and Objects Between Europe and Japan, Officina Libraria, Varese-Eoma, Italy(印刷中)、「疫病と美術—イタリアのペストを中心に」高階絵里加・竹内幸絵編『芸術と社会—近代における創造活動の諸相』森話社（印刷中)、「顕現する聖母マリア」池上俊一・河原温編『聖人崇敬の歴史』名古屋大学出版会（印刷中）という４本の論文を執筆した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 宮下規久朗	４．巻 28
２．論文標題 『最後の晩餐』と『食』の美術	５．発行年 2022年
３．雑誌名 MARANATHA　マラナタ	６．最初と最後の頁 1，31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮下規久朗	４．巻 7
２．論文標題 日本におけるヌード表現の社会的意味	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アート・コレクターズ	６．最初と最後の頁 28，30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮下規久朗	４．巻 26
２．論文標題 美術とパンデミック	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 58-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮下規久朗	４．巻 4
２．論文標題 疫病と聖母－バロック時代のイタリアを中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 須田記念　視覚の現場	６．最初と最後の頁 43-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮下規久朗	４．巻 なし
２．論文標題 歴史画と集合的記憶	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中村高朗・虎岩直子編『芸術と記憶―ラビリントスの谺』法政大学出版局	６．最初と最後の頁 90-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計11件

１．著者名 キリスト教文化事典編集委員会	４．発行年 2022年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 790
３．書名 キリスト教文化事典	

１．著者名 森田義之・越川倫明・甲斐教行・宮下規久朗・高梨光正編	４．発行年 2022年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 495
３．書名 ヴァザーリ　美術家列伝　第６巻	

１．著者名 宮下規久朗	４．発行年 2021年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 474
３．書名 聖母の美術全史―信仰を育んだイメージ	

１．著者名 宮下規久朗	４．発行年 2021年
２．出版社 光文社	５．総ページ数 296
３．書名 名画の生まれるとき―美術の力Ⅱ	

１．著者名 宮下規久朗・佐藤優	４．発行年 2021年
２．出版社 PHP研究所	５．総ページ数 222
３．書名 美術は宗教を超えるか	

１．著者名 宮下規久朗	４．発行年 2021年
２．出版社 宝島社	５．総ページ数 223
３．書名 １時間でわかるカラヴァッジョ	

１．著者名 宮下規久朗	４．発行年 2021年
２．出版社 小学館	５．総ページ数 200
３．書名 原寸美術館カラヴァッジョ	

1．著者名 宮下規久朗	4．発行年 2020年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 190
3．書名 一枚の絵で学ぶ美術史　カラヴァッジョ《聖マタイの召命》	

1．著者名 宮下 規久朗	4．発行年 2021年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 480
3．書名 聖母の美術全史	

1．著者名 宮下規久朗	4．発行年 2023年
2．出版社 中央公論新社	5．総ページ数 336
3．書名 バロック美術 ： 西洋文化の爛熟	

1．著者名 小田部胤久・宮下規久朗	4．発行年 2024年
2．出版社 放送大学教育振興会	5．総ページ数 300
3．書名 西洋の美学・美術史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関